



まちぢから協議会（茅ヶ崎市）

行政と地域が一体となってつくる新たなコ

■「地域の力」の結集

茅ヶ崎市では、これまで自治会をはじめ社会福祉協議会、民生委員児童委員協議会、青少年育成推進協議会などの各種団体が地域活動の担い手として取り組んでいましたが、少子高齢化、地域への帰属意識の低下などにより、何十年も続けてきたイベント等が開催できないといった問題が増えてきました。そこで、地域が一体となって課題に取り組むための新たなコミュニティ

として「まちぢから協議会」が設立されました。当初は、新たな取組みということもあり、各地区から戸惑いの声もありましたが、現在では、市内12地区で「まちぢから協議会」が設立されており、市と協働で地域課題の解決に向けた活動が進められています。

■地域の多様なプレーヤーとの連携

協議会では、自治会をはじめ、福祉や農業など様々な分野で活

躍している団体や地域の方々と市の地域担当職員が集まる「協議の場」を開催し、情報共有や課題解決に向けた取組みを話し合っています。例えば、そこで生まれた取組みの一つである「地域の居場所づくり」では、老人クラブの方が一人暮らしの高齢者を誘ったり、農家の方が野菜を寄付してくれるようになりました。さらには、運営をサポートするボランティアの方々も増えてきています。また、行政からは財政的な



ミュニティ

サポートを受けるなど、地域の多様なプレーヤー同士の連携が協議の場を介してどんどん広がっています。

自分たちでできること、行政の力を借りて取り組むことをしっかり議論し、的確に対応するのが「まちぢから協議会」の仕組み。その根底には、地域の課題を解決しながら「地域の力」を底上げし、地域を活性化したいという一人一人の思いがあります。

一言アドバイス

前例踏襲だとおもしろくない。前回以上のものにしようと考えて工夫することが大切。それがやりがいや達成感につながる。



まちぢから協議会連絡会
会長 後藤 金蔵さん

成功のコツ

- ・地域の各種団体が一体となって課題解決に取り組める仕組み
- ・地域と行政をつなぐ「地域担当職員」と「想いをもった地域リーダー」の存在

■組織が生み出した効果

こうした各地区の「まちぢから協議会」の活動支援と相互の連絡調整を目的として発足したのが各地区の代表者で構成する「まちぢから協議会連絡会」。この連絡会の会長である後藤 金蔵さんは「まちぢから協議会ができてから、これまで関わりのなかったNPO法人と連携して防災訓練を実施するなど、関われる団体が多くなったと感じます。さらに、各種団体の協力により地域に広く情報提供が可能になり、イベントの集客にもつながっています。地域のみんなが手

取り合って取り組んだ方が解決できることも多いし、何より地域力の向上につながると思います」と話します。

連絡会の会長であると同時に、湘南地区まちぢから協議会の会長でもある後藤さん。今後は、情報伝達手段にスマホの活用など考えているそうです。

「地域の力」を結束して課題解決に取り組む。そうした「まちぢから協議会」の活動が、茅ヶ崎市内のコミュニティの活性化に大きく貢献しています。



成瀬活性化委員会（伊勢原市）

信頼と地域の絆で結ぶ



■「地域で できることは 地域で」を合い言葉に

伊勢原市の東の玄関口となる成瀬地区において、「地域でできることは 地域で」を合い言葉に2009年3月、成瀬活性化委員会は発足しました。自治

会や商工会、その他団体などが集まる会合で、「地域のために何かやろうか」と話題になったのがきっかけです。

健康で明るく、安全・安心で、地域のコミュニケーションを深めるために、「ふれあいの創出」、「環境整備活動」、「防犯・防災意識の向上」の3つをテーマとして、地域の活性化に取り組んでいます。「取り組みを進めていくためにビジョンは必須」そう話すのは、成瀬活性化委員会の会長である

足立 安章さん。3つのテーマは足立さんの提案だそうです。

■「つながり」や「工夫」から 広がる活動の輪

市からの財政的な支援を得ることなく、人脈を活かし、地域や各種団体をつなぐことで取り組みを進めているのがこの委員会の特徴です。例えば、愛甲石田駅南口広場ロータリーふれあい祭は、バス会社と連携してロータリーを貸し切って開催しています。消防分団による消火実演

や心肺蘇生体験、警察パトカーの見学、自治会による丸太、竹切り体験など多種多様で、かつ親子で参加できるよう企画を工夫しています。さらに、出店ブースは、廃木材を使って作成した折りたたみ仕様の即製アイデア品。使用後は、畳んで倉庫に収納できるという優れものです。

環境整備活動の一環である愛甲石田駅ロータリーの掃除や植栽手入れには、地域に居を構える企業の社員や高校の生徒がボランティアで参加しています。この定期的な活動によりロータリーはきれいに保たれ、最近で

一言アドバイス

成功か失敗かを考えるのではなく、その時ベストを尽くすことが大切。

成瀬活性化委員会
会長 足立 安章さん

成功のコツ

- ・人脈を最大限に活かした取り組み
- ・活動の輪を徐々に広げるための小さな仕掛け
- ・「予算がない」という制約から生み出された様々な創意工夫

はごみのポイ捨ても激減しました。足立会長によると「清掃イベントとは別に地域の方々が自主的に清掃をしている光景を見られるようになりました。小さな単位でも活動の輪が徐々に広がっているのを実感している」そうです。

また、地域の防犯・防災意識向上のため、毎週日曜日に実施しているラジオ体操の機会に、警察署防犯係による講話を依頼するなど、連携の仕方も工夫しています。

■地域のつながりを最大限に活かして

「私達の活動はつながりで成

り立っている。予算がないので、そういったところを最大限使うしかない」と話す足立さん。成瀬活性化委員会の取り組みは、「お金がない」からこそ生まれる人と人とのつながり。そのつながりを最大限に活かした取り組みが成瀬地区の活性化に大きく貢献しています。





しろいにじの家（横須賀市）

医師が始めた集いの場

■地域に根差した医療

「しろいにじの家」は横須賀市鶴が丘にある交流スペースです。開設したのはすぐ近所の三輪医院の千場 純院長。学生時代に僻地で医療に携わったことをきっかけに、狭い専門分野の医療ではなく自分一人で幅広く地域医療に対応できるようになりたいと考えるようになりました。その考え方はさらに進んで、患者さんとその場だけでない関係性を築きたいとの想いか

ら在宅医療を始めます。在宅医療には地域にネットワークを張り、患者さんが抱える心情やくらしの課題にも耳を傾けて、医療以外の相談にも乗る「社会的処方」も不可欠です。そこで始めたのが「しろいにじの家」です。誰でも自由に訪れてランチやティータイムを楽しむカフェや、将棋や切り絵、折り紙などのサークル活動、「まち塾」という様々な分野の講師を招いて実施する講座に参加することが

できます。そうした日常のやりとりから、楽しみや悩みなどを語らってつながり合うことができます。

順調に活動を続けていますが、2015年の開設当初は突然現れた交流スペースの趣旨や活動内容がわからず、近隣住民からの理解がなかなか得られませんでした。地域との関係に配慮しながら時間をかけて地道にコミュニケーションをとり、ようやく近隣住民の理解を得ること



ができたそうです。

■地域資源の見える化

千場院長は、しろいにじの家での活動にとどまらず、ここを拠点の一つとして地域で多様な担い手が連携することを目指し、「鶴が丘^{じんしゃ}人社プロジェクト」を立ち上げました。「人社」とは人が集う場所という意味とのこと。千場院長が中心となって医療、福祉、学校や地域団体などの「地域資源」を把握し、地図上で見られるようにする取り組みをしています。同じ地域の中でも、どこでどのような業種の人が仕事や活動をしているのかは意外と

一言アドバイス

地域資源は実は身近にたくさんあるんです。

しろいにじの家
ちば
千場 純さん

成功のコツ

- ・ケアマネジャーや看護師がいることで安心して通える場に
- ・近隣住民とは地道にコミュニケーションをとって関係構築
- ・地域資源を把握し、見える化すること

わからないもの。地域資源を見える化することで、住民の方が困ったときにすぐに相談したり、助けを求めることができます。一人の医師が立ち上げた交流スペースを起点に、地域で支え合う仕組みが生まれつつあります。





ひえばら
稗原ゆ〜ず連絡会（川崎市）

「地域の力になりたい」という想い

■自治会の枠を超えた連携

川崎市稗原地区の7つの自治会と福祉施設、病院、学校など計15団体が連携し、地域の課題について総合的に取り組んでいるのが、「稗原ゆ〜ず連絡会」。2015年6月に現代表の川田 和子さんを中心に立ち上げました。川田さんは鷺ヶ峰西住宅自治会長を務める中で、町内会・自治会は元より地域の福祉・防災の協議会ともつながり、異職種・異団体が協力することは、

地域福祉を進めていく上で有効ではないかと考え、連絡会を立ち上げるに至りました。

■それぞれの強みを活かして

連絡会は2ヶ月に一度開催しており、その場でイベントの企画や地域課題などの情報交換を行っています。子育て、障がい、高齢、医療、福祉など各分野の専門家が集まっていることから、それぞれの強みを活かした講座やイベントを実施しています。例えば、構成団体の一つで

ある「かわさき記念病院」は認知症の専門病院。認知症について正しく理解し、温かく見守っていくための講座に協力してもらっています。イベントの広報には自治会の回覧板を活用。7つの自治会全てに回覧される仕組みです。

■若い人も一緒に

こうした連絡会の活動は、手作りの小物を販売する活動をしている若いママさんたちにも知られるようになりました。自分



をつなぐ

の住む地域で活動してみたいという想いから、「一緒にやりたい」とお願いされ、ママさんたちを「ゆ〜ずツクルブ」として連絡会に所属してもらうことにしました。小物作りの体験や販売のイベントを実施し、ゆくゆくはスモールビジネスにつなげたいと考えています。意識しているのは、ベテランの立場でむやみに口出しをしないこと。基本的にはママさん世代のやり方を尊重し、困った時だけアドバ

一言アドバイス

同じ想いの方は意外と多いです。

稗原ゆ〜ず連絡会
代表 川田 和子さん

成功のコツ

- ・地域の将来を担う若い人のやり方を尊重すること
- ・勇気を出して協力を求めてみる
- ・人が代わるタイミングには丁寧に引継ぐこと

イスをするようにしています。こうした進め方が円滑な多世代交流を生み出しています。

■踏み出せば道が開ける

連絡会の立ち上げ期は、協力してくれる施設、団体を探す際には川田さんが一つ一つ足を運んでお願いをしました。勇気を出して声をかけてみると、思いのほか「地域の力になりたい」と考えている人が多く、トントン拍子に進んでいったとのこと。しかし、一度うまくいっても、そのつながりがずっと続くとは限りません。構成団体の「人の代わり目」には特に気をつ

かっています。人が代わることで、連絡会が変わってしまわないよう、まずは連絡会に足を運んでもらうなど、引継ぎが丁寧に行われるよう努めています。「一つ一つの団体は小さくても、集まることでできることがたくさんある」と話す川田さん。大切なのは人と人との「つながり」、この想いはいつまでも持ち続けたいとのこと。



南林間地区たすけあいセンター（大和市）

高齢者を地域で支えるたすけあい

■高齢者が安心して暮らせる町を目指して

南林間地区たすけあいセンターは、小田急線南林間駅からすぐの場所にあり、週3回10時から15時まで開いています。

この地域はバブル前後に一気に人口が増え、急速に高齢化が進んでいたことから、2017年、大和市から社会福祉協議会（社協）に「支援が必要な方と支援する方を結び付ける場所をつくって欲しい」と相談がありま

した。そこで、南林間地区の協議会長だった沓掛 大乗さんくつかけ だいじょうが中心となって、社協のほか、自治会や民生委員、老人クラブなどが連携して、南林間地区たすけあい協議会を設立し、個別支援事業や介助予防事業なども行う、たすけあいセンターを開設しました。

■お互いにできることで支え合う

ここでの特徴の一つは、お互いにできることで支え合っていることです。例えば、足腰が弱

く買い物のサポートをお願いしている方がいますが、この方は、人と話すことが好きなので、お話し相手のボランティアに登録しています。また、有償であることも特徴です。感謝の気持ちを伝える手段として、少額の報酬を受け渡してもらっています。これにより頼む方も頼まれる方もすっきりして個別支援を受けることができているそうです。このボランティアは大人気で、2018年度は600件近くの支え



の拠点

合い、交流が生まれています。

また、健康マージャン教室も大人気で、いつも笑い声に包まれています。初めて会う人が大半ですが、この教室をきっかけに仲良くなってカラオケに行ったりクリスマス会を開いたりしているそうです。また、月2回開催する健康測定コーナーや健康講座も人気が高く、ここから新たなコミュニティが生まれています。

一言アドバイス
地域の事情にあった
コミュニティを
目指すこと。

南林間地区
たすけあい協議会
くつかけ だいじょう
副会長 沓掛 大乗さん



成功のコツ

- ・地区内の団体と広く連携する
- ・ボランティア登録のハードルを下げる
- ・ボランティアは少額でも有償にする

■活動を広げる工夫は連携とボランティア募集

センターでは活動を広げるために様々な工夫をしています。その一つが地域に関わる民間事業者やNPOとの連携です。例えば、健康講座は地域のスポーツクラブを借りて実施しています。また、障がい者を支援しているコーヒー豆焙煎業者から淹れたてのコーヒーを購入し、センター内のカフェで提供していますが、この味を求めにわざわざ来る人もいます。

こうした取組みを持続可能にするために欠かせないボラン

ティア募集では、地域のNPOの協力により、チラシの作成・ポスティングを行っています。ボランティアの申込み用紙が一工夫されていて、ボランティアをしたいと思う人の要望に細かく応えられる形になっていて、140名のボランティアの中には19歳の大学生まで登録してくれているそうです。さらに、ボランティア同士でハイキングに行くなど、新たなつながりも生まれています。

南林間地区たすけあいセンターは、これからも地域に人と人のつながりを生みつづけていきます。